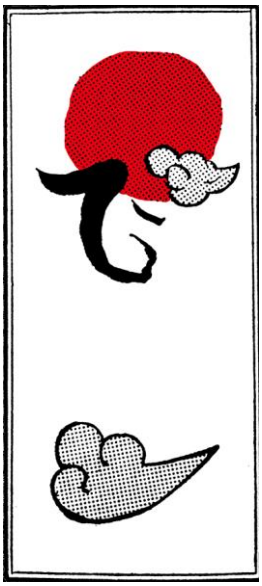

第１號
月　１　回　發　行
ひの心を繼ぐ會
〒791-0510
住所:愛媛縣西條市
丹原町丹原 50-1

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は國家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

月報發刊に際して

今月よりひの心を繼ぐ會の月報を發刊致します。會長の主張、竹葉先生に關する文章、月々の活動報告等を掲載して行く豫定です。ひの心を繼ぐ會の活動をより親しく感じて頂ければ幸甚です。また今年度より表現に於ても竹葉先生に近づくべく正漢字正假名遣ひ表記にも取り組みたいと考へてをります。今後ともご指導のほど宜しくお願ひ申し上げます。

平成三十年四月吉日

會長　三浦夏南拜

立志

竹葉秀雄先生

人の人たるの道は、禽獸と異なる所以を知るところから始まる。そこに志が立つのである。志立つて衆欲は統率調和され、時と所によつて生かされ、精神の光に浴して美しく輝いてくる。克己復禮の高い人格的生活はここに始まる。

衝動にかられ欲望の奴隷となり、放縱と鬪爭、虚榮と憎惡、無秩序と醜惡なる屈辱の現代日本はすべて志を喪つたからであり、青少年の非行化は志の立たないところに根元がある。

愛媛縣に於ては一昨年は中學數校、昨年は縣下殆どの中學で、二月四日の春分の日を「立志少年の日」と定めて、十四歳の少年（中學二年生）を祝して式典を擧げ、家庭では赤飯を炊き、家に國旗を掲げ、市町村當局からも贈り物をして祝福し意義あらしめてゐる。

この歳頃は人生の最も大事な節である。靈性に目醒め、眞の感動を覺え自覺する年頃である。昔は元服を行つた。不良化防止の萬般の施策よりも、眞の志を立てしめることである。本立つて道生るのである。

私は、愛媛での、この「立志少年の日」が全國的なものとなるやう願つてやまない。

但し、その志には藤樹先生の言はれるやうに眞と假とがある。眞の志、道への志こそ人間第一義のものである。

農士道

菅原兵治先生

本月報では竹葉先生三間村塾の意義を闡明すべく、安岡先生の高弟として竹葉先生と竝び稱せられた菅原兵治先生の『農士道』を連載したいと思ひます。農士學校建學の精神、その校長を務められた菅原先生の人物は安岡先生の序に詳しいので、今月は安岡先生の美しい名文を謹んで掲載します。

序

枝葉は木の繁茂であると共に、又一面根幹から分れて尖端化するほど枯れやすく、散りやすい。美しい花も實も亦さうである。絶えず根本の培養を怠らず、時には枝葉を刈り、花實をまびかぬと佳い木にならぬ。

生物進化の跡を木に譬へるならば、人類の生活は正しくその繁茂であり、その文明は花とも實とも稱することが出來るであらう。然しながら人間が漸く自然を離れるに隨つて、生命の衰頽を招き、文明の榮華の裡に滅亡の影の濃くなりゆくことを深省せねばならぬ。故に人間は本能的に自然を慕ふ。達人は常に山水の間に高臥せんことを思ふ。如何なる人も世に住んで或る年頃になると、いつの間にか植木や盆石を愛するやうになる。人間も花木や竹石を好くやうになると、最早年をとつた證據であるといはれるが、穿つた觀察である。それは單なる老成ではない。餘り人間になるから自然に還りたくなるのである。生命の本然に還るところに眞がある。餘り人間に爲ることは僞である。文明には僞が多い。なるほど醫學衛生の進歩に依つて子供の死亡率は減らう。平均に長生きも出來るであらう。然し、民族全體の人口增加率は減退し、清健な長壽者は少なくなる。病氣の手當はゆきとどいても、腎臟や胃腸の慢性病は增加する。體格肉付きは好くなつても神經はいたいたしくなり、風采態度は快活明朗でも、薄志弱行、事に堪へぬ者が多くなる。歴史は文明衰亡史であり、それは先づ都市に於て化膿する致命的膿物を發見するを常とする。文明都市は實は素樸健全な農村生命を榮養として發育し、誤つて之を酸敗せしめるのである。農村を如何に健全にし、天眞を發揮せしめるかは、實に民族國家永遠の根本問題である。余は農村に三種の住人あるべきだと思ふ。

第一は、未だ都市文明に馴染まない純朴な山野の民である。

第二は、都市文明の落後者、敗殘者である。

第三は、都市文明に馴染み切れぬ剛骨をもち、人の世の煩はしさ厭はしさを出來るだけ避けて、叡智と純情とを守りつつ、自由を好み、最も深く山野を愛し、山野を知る人である。單に人といふより、かういふ人をこそ士といふべきである。

第一の人々は勿論、第二の人々とて農村は憐んで溫く包容すべ

きであるが、農村に最も敬愛すべきは第三の士で、それこそ文字通り社稷の臣であると思ふ。

余は昭和の始、一世を擧つて都市商工文明を謳歌し、農村は滅びゆくべきもの、時代に取り殘されたるもの、國家發展に最早積極的效用の無いものとして閑却或は蔑視され、農村の子弟も爭うて村を棄てて市に群り、農村は空しく所謂土百姓の天地となつて荒れ果てた時、久しい深念の果に微力ながら第三の型の士——農士の養成を謀つて、鎌倉武士の典型たる畠山重忠の館跡史藏菅谷の莊に日本農士學校を創立した。その時之が主任となつて今日に至るまで身を以て子弟を率ゐ、耕耘學道にいそしんでゐるのが本書の著者である。

この學校の創立に當つて、余自身その適任でないことは明かであるから、先づここに師となつて事に當るべき人物の物色養成を金鷄學院に於て始めた。昭和二年のことである。著者はその第一期の劈頭に來り投じたのであつた。その頃著者は鄉村の治教の爲に若き眞摯な心を以て、頭腦の明敏に委せて近代の精神科學的勉强に沒頭して居た。そしてその徒に概念を分析し論理を弄んで空理空論に墮し、人格に何の寄與する所もなく、一向生活の光にも熱にも力にもならぬ勉强に疲れ、あせり、悶えて、その解脫と新なる學問求道の熱望に燃えて居た。余は勸むるに東洋古聖賢の學を以てし、或は坐禪靜座に力めしめ、或時は惡辣な苦しめ方も辭せずにその舊習の蟬脫を希望した。著者の學問修道の日新ぶりは實に目ざましいものであつた。餘り精進の結果、時には心身の違和を來しはせぬかと憂へられたこともあつたほどであるが、先哲の學と、靜座と、山水と、耕耘とは、遂に能く著者の心性を打ち成して金剛不壞ならしめた。かくして余は日本農士學校の教學を安んじて著者に託したのである。

爾來著者は講學求道の餘暇、或は尊德の遺蹤を探ね、或は幽學の絕學を興し、又、庄內に明君の農政を按じ十年孜々として學業を怠らず、其の間の思索工夫凝つて本書を成したのである。斯の書こそ農村に關する最も叡智の書の一なることを確信する。

昭和十三年十二月二十二日

渡歐東海道車中　安岡正篤識

★活動報告

- ひの心を繼ぐ會發足より毎月二回の勉强會を計十八回開催。
  『古事記』および竹葉秀雄先生著『土居清良』の勉强會を行ふ。
- 『土居清良』發刊後、愛媛縣各地で行はれた建國記念の日奉祝大會にて販賣。
- 平成三十年三月十八日、松野町にて清良記シンポジウムが開催された。
  會長が參加し、『土居清良』を販賣。
- ホームページを開設。　URL: ehime—hinokai.com

三間村塾に歸る

三浦夏南

竹葉秀雄先生の業績を考へる時、最も目に付きやすく、耳に入り良いのは教育委員長として立たれた日教組闘爭及び教育正常化運動である。勿論それは我々愛媛縣民が感謝すべき偉業であり、竹葉先生の名を廣く全國に轟かせた大業に違ひない。然しながら、物事には花實あれば、根幹があり、深き養ひのないところに大いなる躍進はあり得ない。竹葉秀雄先生の偉業を眞劍に繼承し發展せしむるには、伊豫の聖賢竹葉秀雄といふ人物を生んだその原點へと目を向けなければならない。

その原點こそ竹葉先生の故郷三間にて行はれた三間村塾の聖業であつたと思ふ。農を根基として文武に己を磨く農士の修道。先祖代々次々に受け繼がれて來た三間の土地に深く根を下ろし、山川草木、自然に宿る神々と人々の結び合ふ惟神の生活である。明治以後西洋列强に對抗する爲、富國强兵に迫られた日本は明治維新の眞精神とは裏腹に儒教、佛教以來の强烈なる外來思想に心も形も變質して行く。そんな西洋近代化といふ荒波の最中にあつて、毅然として國體を保持し、次なる維新の根底を培はんとして本に還る運動が起こつた。安岡正篤先生の農士學校、影山正治先生の勤皇村構想はその一つであると信ずる。明治に咲き、散りつつある維新の花に執着するのではなく、百年後の開花を期して次なる維新の根基を培養せんとした昭和の先人達は遠大な深慮に基づいて、時代の流れに抗し、自らの信ずる道を歩まれた。その大いなる根の運動を我々の故郷愛媛に確立し、他の先人に勝るとも劣らぬ深き次元に於て實踐されたのが竹葉秀雄先生である。これは一天才の功業といった段階を遙かに超えた民族の歷史の必然とも言ふべき事業であると思ふ。この竹葉先生の三間村塾の意義を明確にし、それを今に引き繼ぎ行ふことこそ明治維新百五十年といふ時代に生きる我々平成の皇民の責務であると確信する。

激動する世界情勢の最中にあつて時務を適切に處理せねばならぬことは論を俟たないが、混沌の道中であるからこそ肚を据ゑ本質に向き合ふ有志が必要とされるのではないか。ひの心を繼ぐ會の青年は吹き荒れる浮世の嵐に右顧左眄することなく、ただひたすらに三間村塾の竹葉先生の後ろ姿を一筋に追ひ求めたい。

★今後の豫定

・五月八日（火）十九時～二十一時　『古事記』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・五月二十二日（火）十九時～二十一時　『土居清良』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）